a.b.c. 2014 Spring
architectural bulletin of chikurikai
築理会報2014春号　2014年4月発行　Vol.53
東京理科大学工学部一・二部建築学科築理会事務局

平成26年度築理会
総会・講演会・懇親会のご案内

工学部建築学科OBの皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。
昨年度は工学部建築学科50周年の一環として新装なった葛飾キャンパスにおいて総会等を開催（建築学科と共催）致しました。本年度は下記のとおり総会・講演会を神楽坂キャンパスにおいて、懇親会を理窓会倶楽部（PORTA神楽坂）において開催いたします。
また、講演会は東京理科大学理事長の中根滋先生をお迎えし、理科大の今後について「めざせエベレスト！」をテーマに御講演をお願いしております。
公私ご多様と存じますが奮ってご参加ください。

記

1．日　時：平成26年5月17日（土曜日）
　総　会：午後2：30～午後3：15
　講演会：午後3：30～午後4：40
　懇親会：午後5：00～午後6：30
　築理会会費納入の有無にかかわらずどなたでも参加できます。

2．会　場
　総会、講演会：東京都新宿区神楽坂1-3
　　神楽坂校舎1号館17階講堂
　懇親会：東京都新宿区神楽坂2-6-1
　　PORTA神楽坂6階「理窓会倶楽部」

3．会　費：4,000円

4．講演会
　理事長ビジョン2014
　めざせエベレスト！
　“山は登ろうと思わないと登れない”
　講演者：東京理科大学　理事長　中根 滋　先生

5．参加申込
　出席の方は下記宛に「氏名・卒年・連絡先」を4月27日までメールまたはFAXにてご連絡ください。
　築理会会長　林　孝夫
　　E-mail: hayashi.takao@tokyu-cnst.co.jp
　　または、godhopping@yahoo.co.jp
　　FAX 03-5876-1614

8冊目を刊行した「りぼん」の編集委員同窓会

濱本 理沙（Ⅰ部2007年卒）

2013年12月21日、「りぼん」編集委員の同窓会を理窓会館にて開催しました。

きっかけは、2013OBOGと学生交流会に私がOGとして参加した際、8代目の「りぼん」の紹介が学生からあったこと。私は2代目の編集委員を務めていたため、大変懐かしく、ここまで継続されていることに大変嬉しく感じました。

りぼんの話題になると、築理会が初代から支援してきた学生が現在どこで活躍しているのかを知りたい、また学生からも、代々継続した意志や課題について話をしたいと要望がありました。そこで、築理会会長の林様を始めOBの方や、先生方、現役のりぼん編集委員の発案でありますが、昨年から企画が上がっていた「りぼん編集委員の同窓会」を開催し、「りぼん」の趣旨の一つである世代を越えた結びつきを作ろうと思い、Facebookでイベントを立ち上げてOBOGと学生に声かけを行いました。

当日は、総勢25名、初代の2006年卒から、ほぼ各代の編集委員が参加して下さり、築理会や先生方にも参加頂けました。自己紹介で現在の仕事とりぼん編集の思い出や苦労話を話して頂き、各代で工夫して新しい挑戦をし、昨年のりぼんを超えた良い本を作ろうという意気込みが感じられました。実際に8冊のりぼんを並べると、クオリティの向上に感心します。卒業制作は、4年間の集大成として自分を表現した作品ですが、それが帯のように社会に出た後も人と人との繋がりに発展してくことは素晴らしいことだと感じました。

同窓会の後、この繋がりを機会に、初代編集委員の坂巻さんがFacebookのグループ「りぼん編集委員」を立上げて下さり、メンバーを集めています。今年卒業の学生も、OBOGも、編集委員だけでなく、作品掲載・執筆をした方にも輪を広げられたらと思っています。最後になりましたが、今後のりぼんの継続と発展を願うと共に、参加頂いた皆様、下野さんを始めとする「りぼん2013」制作委員の皆様のご協力に感謝致します。

築理会賞おめでとう（2013 年度卒業）

築理会では築理会賞を設け毎年Ⅰ部・Ⅱ建築学科卒業生の中から学業成績が優秀な学生と、優れた卒業制作（卒業設計）をした学生を表彰しています。平成 16（2004）年度に創設した築理会賞も今年度で 10 年目を迎え、平成 26 年 3 月 19 日、学位記授与式会場において林会長から賞状と副賞が授与されました。2013 年度受賞者は以下のとおりです。

・学業成績が優秀
東京理科大学工学部第 1 部
建築学科　　上岡弘明（カミオカ ヒロアキ）

・卒業制作が優秀
東京理科大学工学部第 1 部
建築学科　　石澤拓郎（イシザワ タクロウ）

・学業成績が優秀
東京理科大学工学部第 2 部
建築学科　木下絢瑛（キノシタ アヤエ）

・卒業制作が優秀
東京理科大学工学部第 2 部
建築学科　菅谷由香子（スガヤ ユカコ）

左側　石澤拓郎君、右側　上岡弘明君

菅谷由香子さん

築理会賞の審査を終えて

広谷 純弘（Ⅰ部 1980 年卒）

後輩達の卒業作品を審査するというのは、重い責任を感じることですが、同時に建築の設計に関わる人間としては、学生達の思考や価値観、そして若々しい建築デザインに触れることができる、とても楽しい時間でもあります。

公開審査風景

それにしても、今年の卒業作品については、設計をする以前の問題意識の価値観の多様さに驚かされた。現実の社会的な問題に真摯に取組む者、私小説という枠組みを自らに課す者、音楽作品をベースにした者、新たなユートピアを描く者と様々。そして、それが前面に押し出された上で、実現のリアリティーがあるもの、詩的で情感豊かなもの、ド迫力なアウトプットと、これまた多様を極め、審査員の意見も分かれ、とても難しい審査でした。その中で、築理会賞を受賞した石澤拓郎君の作品は、美しい建築群で構成されていて、心地よいセンスを感じる設計でした。しかしその手法は、楽曲の構成を基に建築の形を決め、例え

プレゼン風景 (石澤君)

ば天井の高い建物なら美術館にするというように、まず他の上位概念で形をつくり、その空間に合った機能を当てはめていくという、機能から建築を作るのとは逆の発想でした。しかし審査員の一人、慶応大学 SFC で教鞭を執る松川昌平さんによると、こういう考え方は他校の同世代の学生達にも見られ、今後建築の新しい潮流になる可能性があるという、興味深い意見を聞くことができました。

また、惜しくも賞を逃したが、ド迫力の模型とドローイングで、それ自体がアートワークのような魅力を放っていた安田大顕君の作品が、せんだいメディアテークで行われた「卒業設計日本一決定戦」で２位に選ばれたことをお伝えします。

この度の審査を通して、築理会賞が後輩達の励みとなり、明日の建築界を築く人材を育てることに貢献できることを実感する充実した時間を過ごすことができました。

プレゼン風景（安田君）

工学部建築学科 50 周年記念植樹

「新たな 50 周年へのスタート」

2013 年会報秋号において報告のとおり、平成 25 年 5 月 18 日、建築学科 50 周年事業は関係者のご協力を得て滞りなく実施されました。事業の精算を行った結果、約 25 万円の残高が発生しました。残余の浄財の処理については 50 周年記念事業実行委員会（委員長：工学部第 1 部栗田哲教授）に於いて審議・検討し、50 周年記念事業を後世に伝えるための記念植樹を行うこととなりました。(既報)

去る平成 26 年 2 月 16 日葛飾キャンパス内（講義棟と管理棟の間にある中庭）に於いて来賓として東京理科大学中根滋理事長、平川保博副学長、半谷精一郎第 1 部工学部長の御臨席を頂き、記念の植樹式が執り行われました。当日は 2 週連続の大雪の影響が懸念されましたが、強風ではあったものの快晴の天気にも恵まれ、来賓による「土入れ」ののち、実行委員による「水やり」を行い、建築学科の 100 周年に向かっての新たな 50 周年のスタートを祝うとともに東京理科大学の益々の発展を祈念しました。

理事長からの祝辞

ちなみに、記念植樹の樹種は、陽光 (ようこう) 桜（「天城吉野桜」と「寒緋桜」の交配種)。3 月下旬ソメイヨシノより少し早く紅紫色の花を開くことから、葛飾キャンパスへの春の訪れを告げる「標本木」となることが期待されている。

(林 孝夫＝ I 部 1969 年卒)

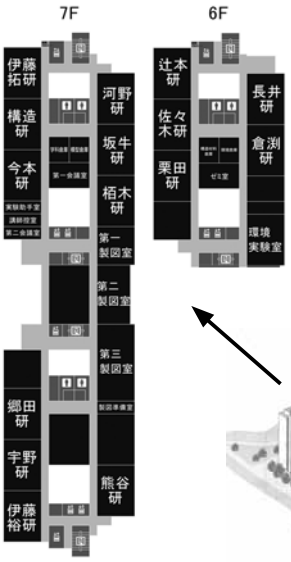
土入れの模様

水やりの模様

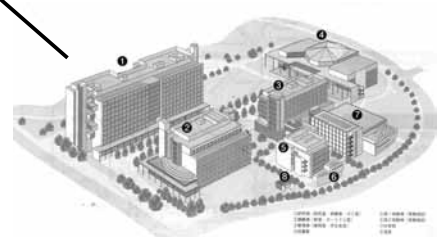
葛飾キャンパスライフ－１年目－

東京理科大学工学第一部建築学科　郷田桃代

金町に移転して１年が経ちました。神楽坂や九段のキャンパスに馴染んだ方々は、ここを訪れ、異口同音、理科大でないみたい、と発します。確かに器としての校舎は大きく様変わりしましたが、不思議なことに同じはずの学生達までどこか違ってみえました。



研究棟６・７階 建築学科配置図



葛飾キャンパス配置図

葛飾キャンパスライフは学生も教職員も未だ手探りのところがあり、居場所づくりを模索していた１年だったように思います。公園の中の塀のないキャンパスには独特の佇まいがあります。保育園の小さな園児たちが数珠のように手を繋いで、眼の前を通り過ぎていきますし、食堂では近隣のママ友やお年寄りの会話が聞こえます。ビジネス街のビル校舎に慣れた学生たちにとっては戸惑いもあったことでしょう。

専ら授業 (講義) を行うのは講義棟で、工学系の９学科の研究室や実験室は研究棟に入っています。建築学科は研究棟の６・７階に陣取り、研究室、製図室、会議室など殆どのものがここにあります。以前に比べスペースは格段に豊かになりました。そのせいか、製図室での共同作業や卒業設計の大きな模型制作も容易になり、研究室学生の暗黙のタイムシェアリング？もなくなりました。新しい器には新しい使い方、運営面の改善を日々試みながら生活しています。

第二製図室での１年生授業風景

研究室風景 (郷田研)

少々懸念されるのは廊下で先生や学生と遭遇することが少ないこと。ＭＩＴのキャンパス計画では中央コリドールでの先生同士の出会いがとても大切と聞いたことがあります。互いの接触が研究の発展には重要とのことで、葛飾では代替する何かが求められているかもしれません。

元々、入念にカスタマイズされた空間というよりはユニバーサルな空間ですから、私達自身で「使いこなし」ていくことが重要・・・大学で建築計画を教える身としては、大きな課題を考えさせられている気がします。

今年も築理会新年会開催される

去る１月 22 日（水）にＰＯＲＴＡ神楽坂にて平成 26 年の築理会新年会が開かれました。

当日は、現役の学生も含めて約 40 名の同窓が集い数十年前の学生時代の思い出や近況報告等で楽しいひと時を過ごしました。又、仕事に関する情報交換等有意義な会となったようです。

さらに、来年はより多くの同窓が参加されるように趣向を変えて開催することも検討していきたいと思っています。

中大規模木造建築物

飯山　道久（Ⅰ部 1974 卒）
（一社）日本木造住宅産業協会

木住協の視察団で、オーストリア・スイスの中大規模木造建築物（7・8 階建ての事務所や集合住宅等）を見て来た。日本とは防耐火や耐震に関する要求性能と輸送制約等が異なるが、積極的な「木材利用」特に CLT 利用の現場を直に見ることができた。「木材利用建築物」の 4 事例を紹介させていただく。視察団の報告書(A4 判 70 ページ)を木住協 HP に公開しているので、他の事例や解説・所感等をご参照戴きたい。

http://www.mokujukyo.or.jp/upfiles/20140124093049.pdf

なお、CLT（Cross Laminated Timber）とは、集成材のラミナーを層毎に繊維方向を 90 度合板のように交互として版にしたもの。1990 年代に開発され、メーカーは欧州で 8 社、生産量は 2012 年 40 万㎥。昨年 12/20 農水省告示で JAS 公布、3/3 の参議院予算委で安倍首相の「建築基準の見直し等を進めて、CLT の活用・普及に努めていきたい」との答弁もあり、数年内に建築基準法関連法令が整う見込み。木材使用材積が多いので CO2 削減に貢献するが、コストが課題。国内 1 棟目が高知県で建築中、2 棟目が長崎県で計画中。

■ミュールベック集合住宅

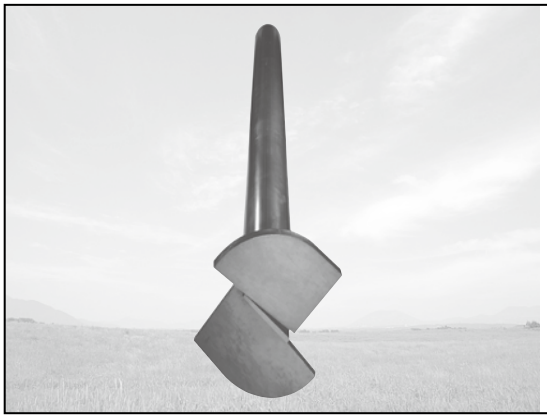
設計コンペで採択されたもの。地下 1 階・地上 5 階建、地階･1 階と階段室コアが RC 造、共用廊下は S 造、他は木造（CLT)。外装に無塗装木材多用、木材変色を想定してスライド雨戸（日除け）他を原色塗装。他の事例で木造 7 階建て集合住宅もあり。

■ライフサイクルタワー（CREE 社）

8 階建て、階段室・EV ダクトは RC 造、その他は壁パネル（集成材柱）+木コンクリートハイブリッド床パネルの構造。木部分は 1 階 / 日の工程で建築（同社 HP に記録動画あり）。同様の構造方式で 20 階建ても可能とのこと。

■ tamedia 本社ビル

坂茂氏設計の木造 7 階建てオフィスビル（新築部分 8,905 ㎡・増築部分 1,350 ㎡)。一部 RC 造部分もあるが構造的には分離。新築部分の集成材柱は 6・7 階分通し柱、集成梁も短辺方向（合せ梁）は通し梁、長辺方向は接点毎に継いでいる。短辺方向の 1 通り 7 層分を組立て奥から順に据付け長辺方向に組上げたとのこと。



目に見えない支える技術こそが大切だと考える。

回転貫入鋼管杭ジー・エクス・パイル
G-ECS PILE®

新登場、杭怪拡大! φ114～φ406
※技術開発スタッフ募集中

株式会社 三誠
SANSEI Inc.
http://www.sansei-inc.co.jp

本　社　東京都中央区日本橋箱崎町4番3号 国際箱崎ビル3階 TEL:03-3639-5226 FAX:03-3639-8162
東京支店　北関東支店(北関東営業所/茨城営業所)　新潟営業所(北陸出張所)　東北営業所
西日本支店(関西営業所/中部営業所/九州営業所)　沖縄営業所
【昭和48年 工学部建築学科 代表取締役 三輪富成・専務取締役 小川ひろし 他2名】

集成材の柱・梁に防耐火被覆はない。吹抜けや階段でオープンな空間（休憩室等）は、事務室とはガラスで防火区画されている。

■チューリッヒ動物園象舎

屋根の縁に幅２ｍ×厚45ｃｍのRC造リング（内臓ケーブルでプレストレス導入）を回し、その上に木造シェル（直径80ｍ・最大天井高18ｍ）を架けている。木造シェルは、CLT（80ｍｍ）を３層重ねた240ｍｍの下弦材・メインビーム・上弦材LVL40ｍｍで成540ｍｍの木製Ｈ型複合梁を形成し、網の目状に配置。断熱層・雨仕舞や天窓（色々な形の271窓）の蓋いはさらにその上。最外装はメンテナンス時の歩路。

高橋修一さんが主宰する「住まい塾」を訪ねて

野田 正治（Ｉ部1970年卒）
目白大学社会学部特任教授、芝浦工大非常勤講師

５期の高橋さんが主宰する「住まい塾」を、春まだ浅い三月の初旬、川越に近い志木に訪ねた。街道沿いにある仕事場は、外壁に木を張った出桁造りの、古い商家の内部を改装して利用している。昔は川越のように商店が軒を連ねる街並みであったろうと思わせるのだが、歩道から一間ほどの空地に高木を含めた植栽をほどこし、斜めに小径を入口まで設けているので、距離感と清涼さを感じさせ、他とは異なる空間演出となっている。

主宰する「住まい塾」はその理念に共感する設計者と施工職人、それにエンドユーザーである建主が集まる家づくり集団である。名前の通り住宅が主で、30年間で累計600棟以上を世に送り出している。

「住まい塾」東京本部にて
左側 高橋修一さん 右側 筆者

高橋さんが大切にしていることは、丁寧な仕事をするために年間20棟ほどにあえて限定していること、また、「三位一体」という「設計者と施工職人と建主がその思いを重ねながら家づくりをする」ことである。建主を教育し、すぐれた職人を集め、優良な材料を揃えてくれる会社を集合して実践している。その作品は、雑誌『住宅建築』誌上で何度か特集され、その作風は師事した故「白井晟一」の薫陶を受けて、独特の輝きをはなっている。

その住宅とは、基本的には無垢の木と漆喰で造られている。宮大工と同じ手法で、つまりボルトを土台以外は使わずに行う構法なのだが、在来工法ではなく、伝統工法と呼ぶ方が正しい造り方といってよい。いまどきこんなことができるのは、尋常ではない精神力の持ち主だということを、今回のインタビューであらためて思った。

写真を見れば、作務衣を着た高橋さんは伝道者のようだ。白井晟一の事務所で10年間修業し、本人は謙遜するが、書の腕前も認められていたという人らしい佇まいである。しかし、彼の道程は最初から順調であったわけではない。秋田の雪深い湯沢市で、写真館の長男として生まれた高橋修一少年は、写真館を継がずに建築家となった。それは偶然のようだが、必然的なドラマがあった。

50年前、高橋さんは東京オリンピックの聖火ランナーとして、地元の街道を走っていた。それは横手高校の

棒高跳びの選手として国体に出場し、また東北６県大会で優勝した記録を持つ実績があったからだ。そのまま体育大学に進学しようとしていた矢先に、練習で、主流となりつつあったグラスファイバー製のポールが折れて骨折入院をしてしまった。病院に彼を見舞った、スカウトに来ていた大学の関係者のアドバイスから、逆に小さいころからの夢であった建築家になりたかったことを改めて思い出した。

軽井沢山荘外観

実は、中学生で修学旅行に行く前日、隣家からの火災で自宅が半焼した時に、建築をやろうと決心していたことを思い出していた。結局、修学旅行に行けなかったのだから、強烈な印象が残っていたのだろう。また、「写真館を継ぐ選択肢もあったのでは？」との問いに、「写真には興味がないふりをしていた」といたずらっぽく笑って答える姿を見ると、けっこうな策士かなとも思わせる。そこで、結果として体育大学ではなく、理科大に進学した。

大学では設計製図や図学が優れていたこともあって、井口先生の勧めで井口研の助手として大学に残ることになった。3年間の助手生活の間も「住宅研究会」を主宰していたというから、根っから住宅好きなのだと思われる。それは、少年時代を両親だけではなく叔父や叔母の家族と親密に過ごした、とても幸せな豊かな家があったのだと筆者には感じられた。高橋さんの根幹にはその家があるように思えた。

白井晟一に師事したことも偶然のようだが、必然的であった。どこかで建築の修行をしたいと考えた先はやはり大建築家であった村野藤吾の事務所であった。村野に直接、手紙を出して、村野が東京出張時に定宿にしていた赤坂プリンスホテルで会う約束を取り付けた。

だが、運命は急転回をみせる。村野に会うまでのあいだに、井口研の仕事で九州での学会に出席した帰り、佐世保の「親和銀行本店」を見学する機会があった。それは白井晟一の大傑作だが、その内部は見学者が思わず一瞬沈黙してしまうほどの出来栄えであった。そこで、また白井に直接手紙を出した。「村野事務所の作品はムラがあるが、白井の仕事にはブレがなかった。」という理由からだが、ここで方針転換をした。幸いにも白井から返事があり、会ってめでたく修行することになった。

高橋さんの手紙作戦は村野藤吾や白井晟一のこころを動かしたわけだが、それには理由がある。「字は体を表す」というごとく、高橋さんの字体には風格があることだ。文体も真摯な感じをうけるだろうし、その書体を見れば、書家でもあった白井晟一ならずともこころを動かされるであろう。「住まい塾」を長く続けている理由も建主を動かし、納得させる力がそのあたりにもありそうである。

白井のもとでの修行は、建築案がなかなか実現しなかったようだが、10年の年月が流れ、白井の死とともに終了した。筆者は修行中の高橋さんを白井の自邸であり、アトリエであった「虚白庵」に訪ねたことがあった。ひとり図面を描いていたが、白石を敷き詰めた中庭に一本だけのしだれ桜が咲いて、重厚な白壁に囲まれた室内は、ブラジリアンローズの無垢材の建具や家具もあって、薄暗がりのなかにいたことを今でも覚えている。つまり、かなりストイックな空間のなかで、さらに彼の感性は磨かれていったのであろう。おそらく常人にはできないことかもしれない。

白井のところに居た頃も、他分野の人々と「住宅研究会」を続けてきたことが「住まい塾」につながった。当時住んでいた高島平のマンモス団地の各棟にある掲示板に「住宅セミナー」のチラシを貼って歩いて、最初30人ほど集まってくれたそうだ。良い住宅をつくるにはどのようにしたらよいかという話をしたそうだが、出席者から「それはわかったが、私たちは具体的にどうしたらよいかわからない。」と質問されたことが「住まい塾」を始める原動力となった。

その「住まい塾」の神髄を次のように語っている。(『住宅建築』2013年12月号より)

「住まい塾の三位一体の家づくりは、建主・設計者・施工職人が思いを重ねながら家をつくるという、いわば当たり前を目指す実践活動である。人間と人間が重なり合わなければ、ものづくりは真の意味で成立しないのだというこの原則は、いつの時代にも変わらぬ普遍の真理である。大量に生み出される現代住宅の悲劇の原因は、このものづくりの精神が体を成さぬ程に型くずれを起こした点にある。

内部は無垢の木と漆喰でつくられている

住宅に使われている素材たちを直接手に取って、じっくりと見ることだ、働いている職人たちの表情と眼を、じっくりと見つめてみることだ。その奥に必ずや、この時代の一般住宅がどれ程深刻な悲劇を抱えているかが見えてくるに違いない。住むに価する住宅とは、こうした精神土壌の改良からはじめて生まれ、育ってくるものである。」さらに詳細は『知的住まいづくり考』(高

橋修一著) を参照されたい。

筆者は高橋さんと大学の同期で共に建築研究会の仲間であったが、10 年間丹下健三のもとで学び、巨匠のもとにあったという意味では似かよっている。一昨年自邸を建てたが、「住まい塾」の仕事をしている職人たちの手になる家である。無垢の木と漆喰で、伝統構法の平屋、小さい中庭がある家である。家とは高橋さんが述べるごとく、そのようなものだと実感している。

インタビューのあいだ高橋さんにお茶を点てていただき、塾生がつくるまかないの昼食を皆で食して辞したわけだが、家を設計するということの本質を知った。

理窓会会長に石神一郎氏が就任へ

理窓会会長　石神一郎（45 工・建）

平成 22 年就任の山田義幸前会長の後任として、この 4 月から私が会長の大役を承ることになりました。私は昭和 45 年工学部建築学科卒で国家公務員として国民に奉仕する仕事に携ってきました。平成 19 年 5 月から 23 年 4 月まで 2 期 4 年間林孝夫現会長の前任として、築理会会長を務めさせていただきました。それ以降は理窓会と築理会の活動に関わってまいりました。築理会の会員の皆様は同時に理窓会の会員であり、築理会は理窓会の登録関連団体でもあります。理窓会は 18 万人の会員と大学の発展に貢献できる活動を目指します。皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

◇継続事業はしっかりと継続

毎年開催しているホームカミングデーと坊ちゃん科学賞は大学と共催の 2 大共催事業として定着しています。地域住民を含めて来場者が 1 万人の第 8 回ホームカミングデーに続いて第 9 回は葛飾キャンパスで 10 月 26 日 (日) に開催します。

◇大学、理窓会、卒業生を結びつけるネットワークの構築

現在の社会は経済のグローバル化が進み、会員の活躍の場も日本だけでなく、世界中に広がっております。大学から 26 年 2 月にグループウエアメールアドレスが 18 万人の卒業生及び今年の卒業生に提供されました。メール以外にも Facebook、Twitter といったソーシャルネットワークも活用して、大学、理窓会、卒業生を結びつけるネットワークをしっかりと構築したいと考えております。

卒業生は大学から提供されたメールアドレスの登録手続き、Facebook へ「いいね」Twitter へ「フォロー」をお願いいたします。18 万卒業生がこのネットワークに参加されると「世界に広がるネットワーク」が構築され Web 上の交流が深まり、それが大学の応援に繋がります。卒業生が世界中のどこにいても発展・変貌する大学や理窓会とその関連団体などの価値のある情報が瞬時に卒業生に届くようになります。

平成 26 年会費納入のお願い

現在、平成 26 年度の会費の納入をお願いしております。同封の振込用紙にて、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のため、多くの方のご協力をお願いします。

年会費　3,500 円
加入者名　築理会
口座番号　郵便局　00110 ー 5 ー 171952

築理会名簿データベース確認のお願い

築理会会員の皆様に於かれましては、日頃から築理会活動に御支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。お陰様で、築理会会員数も I 部 II 部建築学科卒業生、大学院修了生の合計が 7200 名を超えるまでになりました。(I 部 49 期、II 部 35 期)

現在築理会は皆様のご協力を得て、会報の発行、総会・懇親会の開催、新年会の開催、卒業生名簿の発行及び配布、ホームページの開設、築理会賞の表彰、りぼん発行の支援等の活動を行っております。築理会の各種活動に関する情報を周知する手段としては総会における事業報告のほか会報・ホームページ・電子メールを活用しておりますが、皆様のお手元に確実に情報をお届けするためには住所等の個人情報が必要となります。実情は、転勤等による住所の異動のため、会報等の印刷物が届かないケースが発生しております。そのため会員の皆様のご協力を得て、住所等の個人情報（築理会名簿データベース）の確認を実施しており、本年、平成 26 年が当該年になります。データベース確認には皆様のご協力が不可欠でありますので御支援ご協力をお願い申し上げます。また、従前から名簿の使用は築理会会員相互の親睦のために限定しており、名簿の作成に当っても個人情報の取り扱いに慎重を期すとともに、使用する個人情報に関する項目ごとに確認を行い、同意を頂いた項目を名簿に記載し、名簿に掲載を望まない項目のある場合は該当項目を非掲載としております。

詳しくは皆様にお送りする「築理会名簿データベース確認」をご覧下さい。このデータベース確認業務が円滑に進むよう皆様のご協力をお願いいたします。　（築理会会長 林 孝夫）

「 編集後記 」

昨年末、1 期から 8 期の「りぼん」編集委員が集まって同窓会が開かれました。「りぼん（理本)」という名前には、「世代を超えた交流のリボンを結び、本書を通じて更に多くの方々とつながっていくことを、その主たる目的としております」(りぼん 2007 の序文より) という願いが込められているとのこと。そんな、りぼんの歴史がまた一つ、重ねられたのだと思います。

(安達功＝ adachi@nikkeibp.co.jp)

築理会報 2014 春号

2014 年 4 月発行　Vol.53

発行所　：東京都葛飾区新宿 6-3-1
東京理科大学工学部一・二部建築学科
築理会事務局　会員問合せ　chikurikai@gmail.com
FAX　03-5876-1614

編集長　：安達　功

編集委員：石神一郎、大岩昭之、野田正治、藤森正純、荒井眞一郎、広谷純弘、増村清人、森清、伊藤学、高橋潤子、松浦隆幸、山名善之、平賀一浩、栢木まどか、深野有紀、大槻尚美、野村奈菜子

印刷発送：中桜印刷株式会社